

九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中村哲著述アーカイブ
Nakamura Tetsu Digital Archive

ダラエ・ヌールへの道：アフガン難民とともに

中村, 哲 著

VII 流鼠録

<http://hdl.handle.net/2324/4772346>

出版情報：ダラエ・ヌールへの道：アフガン難民とともに,
pp.229-268, 1993-11. 石風社

バージョン：初版、1993-11-30

権利関係：©Tetsu Nakamura printed in japan 1993

石風社より許諾を得て本文を公開しています。

公開しているPDFの印刷、複製および許可のない二次利用はおやめください。



KYUSHU UNIVERSITY

VII

流竄録

複製・出力・二次利用禁止

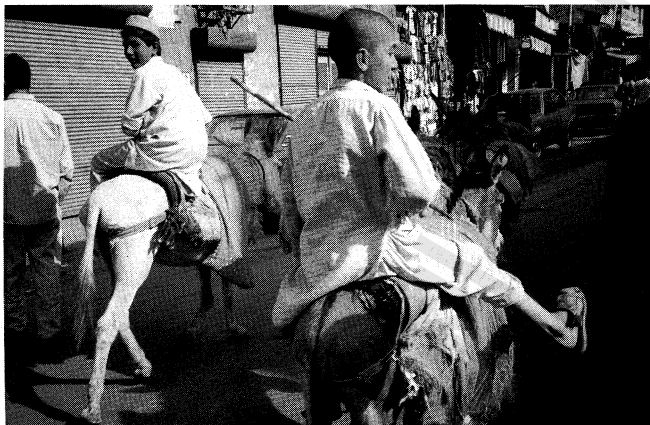
共に生きられるか——子供の現地教育

“ハロウィーン”

現地ワーカーとして最も苦しい瞬間は、「人々と共に」を常日頃口にしながら、現実には我々もまた欧米の高級クラブの一員に過ぎぬ一面を実感させられる時である。私もまた、日本人ゆえの、挫折にも似た苦い思い出がある。

一九八八年秋のある時、うちの二人の子供が通っている学校の行事のことで、小さな論争が我が家であった。当時上の子は九歳で小学校三年、下の子は六歳で小学校一年だったが、それまでのウルドゥ語教育では帰国後の事が心配で、その一年前にペシャワールに出来たインターナショナル・スクール（アメリカン・スクール）に転校させていた。ペシャワールでは事実上唯一の英語学校なので仕方がなかった。ウルドゥ語から日本語への切り替えより、英語から日本語の方が帰国後は楽だろうというのが単純な親心だった。

問題になったのは“ハロウィーン”という米国の祭りである。子供達にとってはクリスマスに次いで楽しいお祭りだから、そのこと自身をとにかく言っているのではない。



現地の子どもたちは学校教育を受けることは稀で、
いっばしの「小さな大人」として働く

我々は、週に一回難民キャンプ診療に出掛けていたが、当時パキスタンに流れて来る飢餓難民が月に四万人、更に冬を目前に十数万人となるのは時間の問題で、新しく出来始めたキャンプの実情は語るに忍びない状態だった。インターナショナル・スクールに通学している子供の殆どは、これから難民関係の仕事でやって来た外国人の子弟の筈で、それに学校周辺にさえアフガン難民が絶えずたむろしていた。

問題は、このような実情の真っ只中で、学校側がペシャワールでは贅沢な高級外人クラブ（と見なされる）アメリカン・クラブと提携して派手に市内を練り歩き、クラブの中でハロウィーンという米国の祭りを傍若無人に騒ぎ立てることである。しかも、反米感情が強く異教徒に厳しい土地柄、余りに目立ち、デリカシーを欠く。私自身はその仲間だとは思われなくなかった。「自粛すべきだ」

と思った。

何歳頃か忘れたが、敗戦直後の混乱（今思うと朝鮮戦争前の北九州のようである）の場面をうつすらと子供心に覚えている。ジープに乗った米兵がチョコレートやチュウインガムを投げ捨て、争って群がる子供を眺めて楽しんでた。親の達しで拾って食えなかった胃袋の恨みのせいか、何故かこの場面は強く印象に残っていて、このての繊細さを欠く連中に怒りと屈辱感を今でも覚える。

自分の子供がハロウィーンの準備を家で楽しそうにしているのが面白くなかった。それが私の屈折したナシヨナリズムのせいか、胃袋の問題に基づく反米感情のせいかは、知らない。私はついカッとなって、「ヤンキーの猿まねをして地元の間人を馬鹿にするな！」と子供を怒鳴りつけてしまったのである。

しかし、子供達にしてみれば何の事やら合点のゆくはずもない。「ヘンなお父さん。きつと機嫌が悪いんだ」くらいにしか思わなかったろう。家内からも、「何も子供にそんなに言わなくとも」とたしなめられた。

連合国対枢軸国

だが、同様の不満の声が他の外国人父兄からも上がった。自分だけではないのだと内心ほっとした。そして、このために特別の父兄会が持たれることになった。果たして、これをめぐって激

論が戦わされ、誇張すれば、小さな「諸国民戦争」を現出したのである。

元々このインターナショナル・スクールは、自分の子供の教育に困った難民援助機関の父兄が集まって作ったもので、生徒は幼稚園から小学六年まで入れて合計三〇名足らず、小さな田舎の分校の趣があった。英米人は居ず、ドイツ・フランス・オランダ・イタリア・オーストリアなどEC諸国からがほとんどで、東洋系は日本人たる我が家が二名、アフガン人二名が居た。

最も強硬派はドイツだった。口火を切ったドイツ人は、三人も子供を入学させており、高い学資にも音を上げていた。齒にきぬ着せず、真っ向から反対論をぶち上げた。

「英語で教育をするからということでは子供を入学させたのだ。高い授業料を払ったあげくに、アメリカの習慣まで教えられる筋合いはない。第一、ここにアメリカ人の子供は居ないではないか。」

紳士的な口調で、しかし尊大で冷ややかに、反論したのはオランダ人だった。

「インターナショナル・スクールである以上、その規定のカリキュラムに従うのは当然ではないか。ならば、パキスタンの地理・歴史を教えるのもおかしいことになる。合法性を尊重すべきだ。それに、ペシヤワールのような所は独立採算を求められている。授業料の規定も世界的な基準で致し方なからう。」

彼は、米国系の団体で働いており、余裕たっぷりである。他の国連職員の子兄もだいたい彼と同意見だった。

ドイツ人の方はますます激高し、罵声に近い大音声を張り上げて反駁した。

「我々がここで払う授業料も、元をただせば『難民援助資金』だ。君は本当にボランティア精神を持っているのか、難民に対して済まぬという気持ちがないのか。」

イタリア人がこれに同調した。

「そうだわ。自分の子供達がカウボーイのような真似をして遊ぶのは嫌だわ。」

と述べた彼女は、主人の赴任に従った気さくな元理学療法士で、ミッション病院らい病棟にも快くボランティアとして手伝いに来てくれていた。

私はと言えば、このでの議論に巻き込まれるのは嫌で、さりとて地元のウルドウ語学校に子供たちを返すのも気が引けた。友達もでき、何より子供らしい付き合いの楽しさで学校に通っていたからである。ただ、ドイツ人たちの態度は、確かに紳士的だとは言えなくても、そっちの方が共感できるものがあつた。

「学校の外は現に浮浪する難民であふれている。皆の反感を買う恐れがある。子供の安全性も考えるべきだ」とだけ私は述べた。

学校分裂

当然話し合いは決裂し、学校の分裂は必至となった。米国・国連系団体所属の者と、ドイツ・イタリア系との溝は決定的となった。ドイツ人はECの資金を誘致して、別に「ヨーロッパ・

スクール」を設立する事を決心した。彼は行動的であつた。自分の借家を改造して教室に仕立て、EC支部とすかさず連絡を取って財政支持をとりつけた。一ヵ月後には案内状が届けられた。

その規定には、①アメリカ英語ではなくイギリス英語で教育し、②EC諸国で共通する教科を教え、③同学校の学年を経たものは帰国してもそのまま自国の学年に編入できること、④第二言語として自国の国語も学べること、⑤授業料はインターナショナル・スクールの約半分、第二子以後は更にその半額とする事が明記してあつた。

かくて少ない学童の熾烈な争奪戦が展開されることになった。子だくさんのドイツ・イタリア系が抜ければ、インターナショナル・スクールも財政危機に陥るという深刻な事態になった。ドイツ側は敵愾心の余りか、採算を度外視して日本語の流暢なスイス人を教師として呼び寄せ、「ECと言っても、狭い国際主義をとるのではない」として、盛んに我々を勧誘した。間に挟まれる立場になった私は、程なく或るアフガン人児童の父親が暗殺されるに及んで身の安全を考え、地元との摩擦の少ないと思われるドイツ人グループに合流した。

ヨーロッパアン・スクールでは日独伊の旧枢軸諸国で十名以上を占め、これに地元アフガン人子弟を加えて、インターナショナル・スクールと児童数をほぼ折半した。

まるで国際関係の漫画的な縮小版である。偶然かも知れぬが、日独伊の親近感が合わさつたのは歴史の亡霊を見る気がして複雑な思いがした。しかし、それにもまして割り切れなかったのは、私もまた、子供の教育に関しては、「アメリカかヨーロッパか」という二者択一しかとれなかつ

た事である。「地元のウルドゥ語学校で学ぶことが帰国後に不利になる」という親心が正しかったかどうか分らない。

——こうして、子供の教育問題は壁になった。家内もまた、主婦として家事に追われる傍ら三人の子供の日本語教師を兼ねるのは限界に来ていた。一方、現地の仕事はやっと軌道に乗り始めたばかりである。しかし、どうせ先の長い話である。ここで家族を思い切って帰国させ、自分は単身とどまって現地と日本を往復する生活に切りかえる決心をした。

流竄録

友人たちの死

日本側の補給がなければ現地事業は成り立たぬ。さりとて過度に日本側に気を遣うと、これまでの事業が進まない。私には日本側の苦勞も、現地側の苦勞も、両方が解るので板ばさみだった。いくら現地事情に通じているといっても、いくつも体がある訳ではない。それに、パキスタン側とアフガニスタン側は協調がほとんど困難であり、その調整にも苦しんだ。「いつそ客死でもすれば申し訳も立つて楽になる」という敗北的な思いが、脳裏をかすめたことも無いではなかった。加えて、日本に家族を送り返した後の生活保証は、ただただ他人の情けにすがってきたのである。一九九〇年六月に一旦帰国した後、決意どおり、活動の制約になっていた派遣団体との契約を七月を以て解消して退職、身柄を福岡の病院に移し、家族の生活の糧を得ながら活動が続けた。年に数ヵ月を日本の病院で働き、大部分を現地活動に割く積もりだった。だが、これも同病院の院長の好意にすぎるもので、みなが多忙な病院では肩身の狭い思いをした。十年の歲月は「専門医」としての働きを困難にしていた。この院長には世話になりっぱなしで、その上私の事で迷惑

がかかるのが何よりも辛かった。甘えることはできなかった。

家族の「日本復帰」のお膳立てを一応整えた後、九月から十二月はペシャワールに戻った。スタッフの団体交渉などで傾きかけていたJAMSの立て直し、新築されたばかりのミッション病院らいセンターの再編で忙殺された。救いは年単位で志願する医療関係者（ワーカー）が増えてきたことで、この時期、ありがたかった。日本側「ペシャワール会」の人的協力は「現地理解」の上でも大切だった。それに、拡大する現地事業はとも私一人では身が持たないことは思い知らされていたので、送られてきたワーカーたちの現地語の学習や病棟での技術指導にも力を尽くした。

しかし、同年十二月に一時帰国直後、それまで支援会のペシャワール会事務局長として陰に陽に力になってきた友人、佐藤医師から突然の電話があった。夜勤の時で、丁度急患が担ぎこまれて忙しい最中だった。慌ただしい病院の喧噪の中で、力のない声がした。

「哲ちゃん（私のこと）、自分はもうダメだ。俺の分まで頑張ってくれ。」

何のことかよく分からない。明るくて温厚ないつもの彼とは違う。いぶかしげに尋ねた。

「どうしたとか、こげん夜中に。何かあったとか。」

「今九大病院から電話しとる。癌だったよ。あの腰痛は腰椎への癌転移やった。今日の組織検査で分かった。原発巣はわからん。入院して調べることになった。」

「そりゃ、誤診かも知れんぞ。まあ、もつとはつきりしてから心配しようや。」

「間違いなか。後はよろしく頼む。僕はしばらくは出て来れん。それから、この前聞いたが、B先生が君の事を心配しとった。『うちに来ても良か』と言うとったらしい。いっぺん相談に行ったらどうや。」

「そげん事はよか。待つとれ、来週には会える。その時、話は聞こう。」

半信半疑だった。二十年以上の旧友が、もう暫くすると確実に目の前から消えて行くのか。あまりではないか。やはりペシャワール会の支援に熱心に奔走していた彼の義理の姉も乳癌の末期で、痛ましい再会をしたばかりだった。この二、三年のうちに、ペシャワール関係の人々が次々と逝去していた。私のペシャワール行きを事実上準備した派遣団体の前総主事、同理事で力を尽くした救世軍ブース記念病院院長、地元では新貝勲氏（福岡登高会会長）、農業関係で協力を誓った中田正一氏、いずれもペシャワールの活動の熱心な支持者で、まだ死ぬには早すぎる人々ばかりだった。

馴染まない日本の都会の病院の喧噪と慌ただしさの中で、突然言いようもない寂寥に襲われた。逆らうことのできぬ自然の厳しい掟を感じた。外では小雪が舞っていた。一九九〇年、湾岸危機の緊張した高まりの中で、巷では戦争の噂と的外れな「イスラム」への心ない評論が横行し、八年ぶりの日本の師走は、沈鬱のうちに暮れかけていた。

せちがらぎ日本

日本の風は意外に冷たく身に染みた。ただひたすら現地の人々を裏切らぬよう奔走する事で希望をつなぎ止めていた。また、熱心なペシャワール会の活動に携わる人達のこと、日本に帰ればこそよく理解でき、頭が下がる思いがした。また、心ある多くの知友が集い、無条件の好意で支援を惜しまないのも心温まる励みだった。一九九〇年頃には、長年のペシャワールの活動が各方面で評価されるようになっていたが、意に反して称賛が私個人に集まる事も少なからず、私生活の上では負担になっていた。

久しぶりの知人に夕食を誘われても暇がなくて断れば、「あいつは有名人になったからな」とも言われた。「ボランティアでも長期でなければ役に立たない」と述べれば、「有名になった先生はそれで良からうが……」などと皮肉めいた反論もされた。増大する現地補給に抗し切れず、新設された外務省のNGO補助金を受けた時は、ある筋から「国家権力の手先」とまで風評を立てられた。ゲスの勘ぐりか、意地悪か、私には良く分からなかった。官僚組織の中で働く人々にも様々ある。良心的な人々はペシャワール会の活動に好意を寄せ、彼らのできる範囲で何とか便宜を図りたいと損得ぬきに思っている者もある。十把一からげに「権力機構との協力」などと決めつけられるのには抵抗があった。さらに、「それでは世間が……」というのが日本の殺し文句らしく、等質であることを強制するような、底意地の悪い冷たさを感じた。

陰の最大懸案として、長期の現地協力態勢を敷くためにも当然、家族の生活を安定させる事があつた。だが、あちこちに恩義があつた。家内の里に厄介になつていたが、これにも氣を遣つた。また、岳父母は年寄りの二人暮らしにもかかわらず、我々一家が転げ込んできても、三人の孫たちを可愛がり、何くれと快く面倒を見てくれたのである。家内は自分の里であることもあつて、それで半ば落ち着いているようだった。岳父母も、「あんたたちが居らんことになった後は、火の消えたごとある」としばしば述べていた。

私の母は八十の齡になつていたが、姉夫婦と同居していた。義兄も心の広い人で、迷惑の尻拭いにも嫌な顔ひとつしなかつた。日本を空けていた時期に、母の面倒を一切背負つてくれた。だが、姉とはもちろん実母の関係だから、母も姉に対してはある程度のわがままや愚痴も氣兼ねが無かつた。私が「戸籍上の長男」という格式ばつた話より、ここは姉夫婦に甘え、出来るだけの仕送りを続ける事で勘弁してもらい、より快適な老後を生きてもらつたが良からう。

思いめぐらせた末、福岡市に持つていた僅かな土地を手放し、それで得た金で建て増しをして家内の里の岳父母と同居することにした。本人達にはおこがましいが、老夫婦二人で寂しいところで暮らすよりも、我々が傍らに居た方が安心だろう。せめてもの恩義と孝行になるかも知れない。七年も日本を離れていた子供達も、都市の騒々しい学歴競争から離れて田舎でのんびりする方が適応しやすいかろうという、単純な心算だった。だが、土地は思ったほど高く売れず、殆ど蓄えはなく、銀行から借金をして増築し、都合で新しい住まいの土地も買い上げなければならな

った。せちがらいものである。経済大国の日本人は、実は借金で「豊かな暮らし」を確保しているのか、落胆を通り越してバカバカしくなってきた。

日本人なら誰もがする苦勞であろうが、ペシャワールのような所から突然帰った我々一家には、こんな事一つ一つが大変な負担に感ぜられた。おまけに、「あんな所で好き勝手するから苦勞する」などと言われれば、腹の一つも立つ。家族を帰国させた直後の一年間は、ペシャワールにおける十年に相当するように長く感ぜられた。様々な事があつたが、概ね私は沈黙していた。ヒンズークッシュの、あの大山脈の清々しさと、おおらかで率直なペシャワールの人情が常に偲ばれた。それに比べれば取るに足らぬことだ、「神様は見てください」という現地のせりふが慰めのひとつだった。

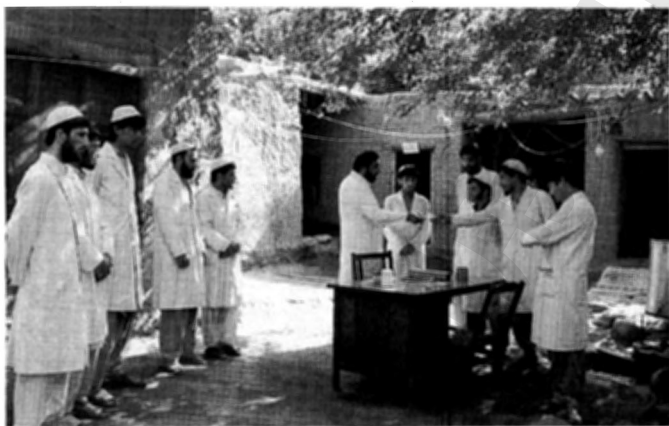
陰の支え

「先生は日本に帰ってしまうのですか。あの外国人たちのように。」

「俺はおまえたちを見捨てない。仕事は長い。疲れぬことだ。」

「その気なら、命も惜しくはありません。」

「簡単に命は捨てるものではない。死ぬ気なら何でもできる。お前達が死ぬまで続けるんだ。そのためなら、俺は乞食でも無頼漢でも、何でもなろう、誇りも捨てよう。」



ダラエ・ヌール診療所の朝礼風景*

このようなやりとりの会話が、まるで鮮明な幻聴のようにしばしば心に浮かんだ。あの人々を見捨てられるものか。しかし、日本ではこの御時世、陳腐な浪花節として苦笑でしか受け取られない事は分かり切っていたので、ペシャワール現地事業への動機について多くを語りたくはなかった。さよう、今の私は乞食に等しく、誇るべき何物もなく、意に反する称賛と批評の目があるだけではないか。人を説得する哲学も論理もなかった。むしろ、日本を覆う「国際化」の風潮に軽々しさを感じ、世故にたけた者の垂れるいっぱしの人生訓は虚ろだった。

こうして一年後には、結局、昔副院長として勤務していた病院に転がりこむ事になった。この院長にも世話になりつ放しだった。私が去ってから実に十年間、ペシャワールへの募金も何事もなかったかの如く続けさえしていたのである。その上、

院長自身以下全職員が激務のところに無為の食客にも等しい私が転がり込むのは、勇気が要った。が、どうせ自分は日本では流浪するどぶ鼠に過ぎない。生きるためには、そして現地のためには誇りも捨てようと、思い切って頭を下げに行った時の事が忘れられない。元々この院長にケチな考えは毛頭なかったが、このせちがらい世相の中で、役立たずの自分が十年前と同じように暖かく迎えられたことに対して、言葉がなかった。多くを語らなかったが、生涯の中で人の情がこれほど身に染みた事はなかった。

実に、このような損得ぬきの陰の支えがあつてこそ、私は現地事業を継続できた。我々を實質的に支えたのは、決してスマートな国際協力論や国際化の時流ではなく、泥くさい義理人情や素朴な共感であつたといつて良からう。これはペシャワール現地でも同様であつた。我々は何らかの「理念」で結束している訳ではなかった。平和時の論客はいざという時に実弾をとばさぬ。我々に必要だつたのは心のこもつた実のある支えであつて、議論やお世辞ではなかった。

「神」を語らず

別の世界

人は生涯のうちで一度は日常の世界を超えた別の世界を垣間見て、驚き怪しむ体験がある。それが暫く忘れ去られていても、ふとしたことから鮮明に思い返されることがある。

一九八九年以来、アフガニスタンの中で幾度かひやりとした事があった。至近距離に砲弾が落下したり、銃口を目の前に突き付けられたりして、外見は平静を装っても、生死の境に立たされているという自覚は何とも名状しがたいものである。私は余程鈍いか、現実的な人間らしく、はた目には「冷静だ」と称賛されることが稀ではない。だが実は、私は内心臆病者で、単に場数を踏んだだけであり、瞬時のうちに未練がましく様々なことを思い巡らすものである。家族はどうなるのだろう、もう少し多額の生命保険を掛けておればよかった、葬儀には困るだろう、親より先に他界すれば不孝者だろうな、JAMSとベシャワール会の将来は……と、一瞬の時間の中で実に多くの事柄が浮かぶ。

私が五歳のとき、確か病気で寝ていた祖父の見舞いに連れられて行った後、突然嘔吐が始まっ

て入院したことがある。「自家中毒」と後になって聞かされたが、どうも意識障害があったらしく、入院までの記憶がないのである。覚えているのは、暗い陰気な病室で白衣を着た人々が立っていて、「リンゲル、リンゲル」という言葉が聞こえたことである。リンゲルとは何物か、その時は解らなかったが、大人たちの雰囲気から何か不安で重大なことが起きているのは伝わった。

また、この時、恐怖に満ちた幻覚にしばしば襲われた。当時地元紙に連載されていた「ユタさん」という四コマ漫画があった。その陽気ではばけた主人公が、夜になると病室に忍び込んで私の胸に五寸釘を打ち込もうとするのである。私は必死だが大人たちは笑って取り合わない。恐怖で眠れなかった。釘を打ち込もうとする者は漫画に出てくる通り陽気で殺意はないが、まるで人間ばなれした別世界の妖怪のようで、私の恐怖など意に介さず、それが義務のようでもあり悪戯のようでもあった。そのうち、また記憶が途切れた。「リンゲル」の話はその後であつたらしい。主治医が来て「幻覚が出ている」と述べ、至急輸液をしたという。

退院した時、祖父はもうこの世にいなかった。これもずっと後になって知ったが、私が悪夢でうなされている頃、「哲ちゃん（私のこと）が先か、おじいちゃんが先か」と親戚の者が集まって心配していたのだという。万能と思っていた大人たちでさえ如何ともしがたい世界があるのを、私は子供心に初めて知った。現実には祖父とはもう会えなかったからだ。それは寂しいというより、不思議な気持ちと云う方が正確で、「別の世界に」祖父が行き、「生きている間は会えない」と説明を受けた通りだった。

それは印象的な体験であつた。これ以後、愛着のある者が「別の世界にゆくこと」が不安な時期が続いた。激しい兄弟喧嘩をした後でも、兄の安らかな寝顔を見入ると、「これも生きているうちなんだ」などと、いとおしい気持ちで湧いてきて、決定的には人を憎めないのである。恐らく自分は子供らしくない、こましゃくれた子に見えたであらう。

超越的存在

この直後に、もう一つの印象的な体験があつた。私は言葉に関しては一種の早熟で、理解の程度はともかく、幼稚園に行く頃には小中学生向きの本が読めた。幼稚園の頃、小学生向きに書かれた或る話を読んだが、この話がなぜか後々まで私の考え方を支配した。

「昔、あおという子馬がいて、自分は強くなりたい、何日も水を飲まずに砂漠を駆け、たくさん大きな馬になりたいと願っていた。余りの熱心さに神様が現れてあおに言った。

『願いを叶えてやってもよいが、それでお前がどんな姿になつても良いのだな。』

あおは、もちろんだと誓い、飛び上がって喜んだ。一夜明けると望みどおり、彼は快速の丈夫な馬になった。しかし、ある時水辺で自分を映し出して、変わり果てた姿に気がついた。キリンのように長い首、ちぢれたタテガミ、醜い姿を悔やんだが、もう元にかえれない。嘆き悲しんでも無駄だった。彼はラクダになつていたのだ。」

たわいもない子供向けの昔話と思われようが、これは不思議に新鮮な衝撃を与えた。この物語りに挿絵がついていて、頁の右上に白い髭の柔和なお爺さんが「神様」として、左下にそれを仰ぐ子馬が描かれていた。「神様」なるものが超越的存在として我々の上に、同時に語りかける存在として我々の中に、君臨するなにかである事を漠然と感じた。とすれば、「彼は祖父のところに自由にもゆけるのだろうか」などと本気で思ったものである。今考えれば、私自身たわいもない事だとは思えても、事実は事実である。恐らく、祖母や両親から聞いた話や説教が心の片隅に残っていて、子供なりに人間とその生死について一つの解釈が象徴的に現れたのだろう。

とは云え、私も何の変哲もない子供であつたから、嘘もつけば悪戯もした。しかし、何か疚しいことがあると、決まってこの「お爺さん」が私の中に笑顔で現れて、対話しながら論ずのである。また、良いことをすると誉めてくれ、美しいものを見るとそこで微笑みかけ、苦しいときは励ますのである。精神科医は様々に説明するだろうが、私は、いわば自分の良心のようなものをイメージとして描き、それと対話するという形で自分の精神形成をしてきたのであろう。自分の育つ中で、善しとされるもの、美しいとされるものが凝結し、心に現れるという特異な体験をもっていた。いや、特異かどうかは知らぬが、私の場合はそんな形をとった。これは中学校に入学する直後まで続いて、次第に明瞭なイメージは失せていった。

ところが、生死を隔てる追ひ詰められた瀬戸際では、これが再び生き生きと現れ、五歳からの四十年間が夢のごとく、まるで「おまけ」で生きながらえさせて貰った気がしてくる。良いこと

も悪いことも存分にした、そして「総て天に決すべし」という、諦めとも委ねともつかぬ楽天的な気持ち湧いてくるのである。

「神聖な空白」

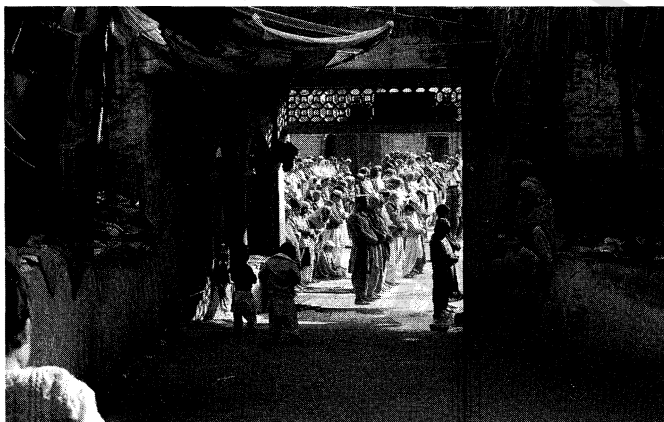
我々はそれぞれに、心の中に死生観や善悪観を持っている。それは生まれ育った環境と出会いの中で、様々に修飾され、洗練され、或いは覆われてゆく。しかし、極端に異なる文化的環境の中でさえも、その核にあるものはそう変わりがないというのが私の確信である。幻覚妄想の病理は別として、後光のさすイエス・キリストが現れようと、蓮の花に囲まれる仏陀が現れようと、精悍なマホメットが現れようと、はたまたそれらを一切否定する「テーゼ」が現れようと、根幹で一致できるなにかを人間は共有している。それらの一致点をなおざりにするとともに、優秀の尺度で人を審いたり、価値観のおしつけが生ずる。

その「一致点」について、哲学者でもない私がとやかく言えるものではない。ただ、現地での体験から確信できるのは、およそ人間と名のつく動物の集まる社会では、人はそれぞれに、侵してはならぬ「神聖な空白」とでも呼べるものを共有し、それに自らの生活から滲み出た言葉で意味を与えようとする事である。謙虚さの根源は、この、人の言葉の限界と相対性を自覚することにあると私は思っている。実態と投影図を混同するところに人間の傲り、偽りが生ずる。投影図の操作で実態を操作できるとまで信ずる所に、人間のこっけいな悲劇が生ずる。

少々理屈っぽくなるが、自然についてもそうであつて、自然を知るとは、決して知識上で知っているという事ではない。例えば、○○チョウを知っているとは、図鑑で見て覚えたとか、ビデオでその生態を科学的に理解したという事ではない。夏の日の木陰で、冷たい山水の流れのほとりて優雅に羽ばたいて憩う、自然の情景の中でそのままに存在するチョウこそが、チョウであるのである。既成の觀念にとらわれず、対象と直接に向き合うところから、その姿が一つの洞察や認識として心にやきつけられる。チョウという実態は変わらずとも、その人の見方と体験で、如何様にもその姿は変化するだろう。ただ聞いただけの科学的知識で「これがチョウだ」と断ずるからおかしなことになる。人間的な自然についても恐らくそうであらう。

宗教

「神」という言葉そのものもそうだった。現地イスラム社会でも、以前の派遣母体であつたキリスト教団体との便りの中でも、幾度やりとりしたことだろう。元々私は、いわゆる「模範的な信徒」ではなかつた。しかし、現地との交渉の中で、自分がそれらしいと感ずるものと、現地の人々がそうと信じて述べるものとの間に、大きな距離がある事を次第に実感するようになった。イスラム教徒はもちろん、同じキリスト教徒でも、欧米人と現地の人々とは、どうも違う。我々日本人は宗教を自己修養としてとらえる傾向が強いようである。「宗教は何ですか」との問いに一瞬考えて、「宗教はありません」と答える者が多い。現地にすれば、こんな答えは大変な



モスクで祈る人々

ことで、教条的な共産主義者としか思われないことである。いや、稀ではあるが「無神論」を自任する現地の人にさえ、そこに宗教的な匂いを嗅ぐことは困難ではない。彼らは神の代わりに無神論を信ずるのである。アフガニスタンで最も戦闘的な左翼の一派も、その行動様式においては過激なイスラム原理主義者と極めて似ていた。

同じ「キリスト」を語っても、我々日本人と現地クリスチャンとは微妙に異なるものがある。礼拝堂で歌われる賛美歌が同じものでも、そこに節回しがいかに現地風でエキゾチックな趣があつて、何かが異なるのである。そこに、それまで考えもしなかった「文化」や「風土」というものが、思想や宗教とはまた別の枠として、得体の知れぬ実態として、介在することを自覚せずにはおれなくなった。同時に、この相違を超えて、人として立つことの一致点というものを改めて自問す

るようになった。

共產主義者によれば、「宗教とは、涙の谷である現世の悲惨を忘れさせる麻薬である」というが、どうも事はそう単純ではなさそうだ。アフガニスタンにおいては、まさに「涙の谷にある人民」が徹底的に政府軍に抗戦してきたからである。欧米人が地元のクリスチャンを「本物ではない」などとしばし言うのを耳にしたが、旧ソ連首脳部もアフガン政府指導部に対して同様な感想を持っていたらしい。単に宗教が同じだから、思想信条が同じだから、というだけで共通の地点に立っているとは言えない。だからとて、人間は同じように悩み、喜び、怒り、悲しむ。自分では分を弁えぬ愚かな問いかと思いつつ、「人間は皆同じ」という事実と「人間は皆違う」という事実とがどうして同時に成り立つのかを考えるようになった。

私自身は、おそらく狂信性とは反対の極にある人間だった。皆が熱狂し始めると急速に覚めてくるし、皆がそう信じていると懷疑を投げかけたくなるという、どうしようもない天の邪鬼なのである。一方私は宗教に対しては典型的な日本人らしく八方美人であり、抽象的な観念の真偽をめぐって死闘を演ずるほどに傾ける情熱が、どうしても起こらないのである。だからと云って、無関心であるかといえは嘘になる。人間の観念や思想が感性を伴って動き出すとき、いかに恐るべき威力を発揮するか、アフガン戦争を目の当たりに思い知らされていた。

二人の精神的權威

「鬼神は敬して信ぜず」というのが恐らく一般的な日本人の良識的モラルで、私も例にもれず、父や祖母からそう教えられた。つまり、「人々が敬っているものを簡単に否定したり非難してはいけない。しかし、それに惑わされてもいけない」というのである。ちなみに、父はかつてロシア革命に触発された古いタイプの豪胆な社会活動家で、戦争という「国難」に直面して転向を余儀なくされたらしい。自分の過去を殆ど私に語らなかつたが、氣骨ある風貌は覚えてゐる。祖母は逆に、熱烈な天皇崇拜者かつ敬虔な仏教徒であつた。祖母も明治生まれの典型的な日本人で、戦時中は厳格な「軍国の母」で聞こえた。だが一方で、「流しに熱湯を流すな。ナメクジが死ぬ」などと云つて殺生を戒め、「貧しい者への施し」を説いた。私の倫理観はこの二人に負うところが大きかつた。二人共私には逆らえぬ恐ろしい精神的權威だつた。

しかし、子供心に「權威」同士に矛盾があることも知つてゐた。ある時、ナメクジに塩をかけると溶けると聞いて面白半分に試してゐるところ、現行犯で祖母にこつぴどく叱られた。祖母の説諭を父に述べると、「ナメクジが何だ。だいたい、おバアチャンはおかしいんだ。生き物を殺すなど言いながら、人殺しの戦争は良いと言うのか。普通なら人を殺すと死刑にされるのに、戦争では金鵒勲章がもらえるんだ。」

冷静な父にしては珍しく激した口調だつたので、その別な顔に驚いた。かと思えば、「お前は日本のために役立つ人間になれ」と言い、やはり明治生まれのナショナリストであつた。戦後の

左翼と呼ばれる人々とは趣が全く異なっていた。父は祖母を煙たがっていたのに、やはり共に保守的で、当然ながらその時代の子であり、この一見正反対の生き方のどこかに、何か似通ったものを子供心に感じたものである。

深く思うところあつたのだろう。両者共に、敗戦後は一切の政治的動きと絶縁し、沈黙を通して死んだ。父と動きを共にしていた叔父の一人も、戦時中は積極的なナショナリストに転じ、各地の前線を小隊長として戦い、兵隊の心情を描いて「戦争作家」として名を成したが、戦後は家族の生活のために生き長らえて十年後に自決した。父も祖母も叔父も時代と思想に裏切られ、新時代との軋轢を胸に、傷心の思いを持て余していたのだらうと、今にしてその気持ちがよく解るのである。かつ思想や信念というあやふやな外殻より、もっと大切なものがあるのではないかと、漠然と思うところがあつた。この思いと疑問はキリスト教徒になつても晴れなかった。

スーフィー

決して自分の愚問を晴らすためにベシャワールに赴いた訳ではないが、生々しい人間の生死に触れ、「人が生きて死ぬ」ということの意味を改めて強く意識させられた。そして奇しくも、この十年は世界的規模で新たな「再編成」が急激に進行した時期でもあつた。過去の価値観が音立って崩れ去り、何が良いのか悪いのか分からなくなり、心ある人々の間には虚空に身をさらされているような思いが拡がり始めたと言えよう。しかし、敗戦にも匹敵する、いやそれ以上の歴史

的變動の中で、アフガニスタンの事業を通して、少なくとも一つの確かな細道を備えられている事を私は幸せに思うのである。この道を行くことをキリスト教風に「ミッション」と呼んでも、私には抵抗がない。

こういう疑問の中で現地で興味を引いたのは、「スーフイー（神秘主義教団）」の存在である。ペシャワールのバザールで、時々奇妙な辻説法師が現れる。人混みの中で、突然「神はいない！」という叫びを聞けば誰もがぎょっとして振り返る。イスラム社会ではタブーの筈の、こんな言葉を堂々と言える自由な人々がいる事は余り知られていない。

スーフイーの論法は誰にでも分かりやすく語られ、抽象的な神学論を一切排除して人々の心に強い印象を与える。常識を破る言葉で意表をつき、対話しながらイスラムの真髄を伝えるのである。集まる人々に取り囲まれ、独特の「説法」が展開する。

「その兄さん、神様いるのかい？」

問われる通行人は当然、当惑しながら「アオカナ（当たり前だ）」と答える。

「そう言うだろうと思った。しかし、しかしだぞ。神がいるなら、何でこの世にこんなに不幸があふれてるんだ？ 満腹した者には飢えた者の不幸が分からない。人はだまし、嘘をつく。正直者でも金がなけりゃ、何にもできない。悪者でも金持ちゃ、王様気取りの贅沢三昧。こんな世の中を誰が作ったんだ？」



街頭で見る人々の眼は輝いている

人だかりが増し、人々は次第に話に釣り込まれて行く。

「西のメッカに向かって祈れば誰でもイスラム教徒だと言うわけじゃないぞ。心の中で何考えているんだ。我々もまたアダムの子、いいもの見りゃ欲しくなる。美人を見れば欲もわく。だが、早まらんでもよい。結婚すりゃ嫌でもアレはせにゃいかん。そこのおじさん、子供は何人だ？」

「五人です。」

「それ見ろ、おとなしい振りをして。」

聴衆の笑いがどつと起こる。時に聴衆を選んで、もちろん服を着たまの演技であるが、性交時の体位まで説明する。皆が苦笑いし、好色な想像をしている時に、突然一喝、

「さあ、礼拝の時間だぞ。どの顔下げて何をお祈りするんだ！」

皆が色をなしている時に、諄々と「イスラム教

徒の道」、人が犯してはならぬタブーが分かりやすく説かれてゆく。時々「そうだろ」と語りかけ、「そうです、そうです」といううなずきを得ながら説教が進む。

地についた洞察

ここには、狭い「イスラム急進主義」もなければ、殺伐な戒律主義もない。おおらかに理屈を超え、教義を超え、人を内側から暖かく慰め、諭す、何物かを引き出すのである。健全なイスラム社会を支えてきたのは、実にこのような人々の存在があることを私は次第に知るようになった。彼らの論法は、既存の生活意識を真つ向から否定せず、むしろその中で使われる言葉に「イスラムの真髄」を託し、心に届けるのである。

私は神学については殆ど何も知らないが、「本当のイスラム教徒かどうかは神がお決めになる」という彼らの論法を煮詰めれば、思想はおろか、宗教間の壁も取り払われる事になる。あらゆる人間の観念を超えるということは、この世で作られた筈の文化的・地域的装いである宗教的儀式をさえ、「人の為せる業」として相対化するという、極めて根源的（ラディカル）なものを秘めているからである。

ものの本によれば、このような神秘主義教団の活動は、正統派神学から「イスラムと土俗信仰の融合」として一言で片付けられ、かなりの迫害もあったようである。しかし私は、ここに何か「相互理解」の鍵があるような気がするのである。限りなく人間の内面の真理に迫ることによっ

て、あらゆる人間事象を相対化し、そこから他者をも肯定的に受容するというこの神秘主義の傾向は、他の偉大な宗教にも見られるものである。

新約聖書の「よきサマリア人の譬え」でも、不信心者である筈のサマリア人が宗教權威をはるかに圧して徳が高いことが明快に述べられている。「神よ神よと天に向かつて叫ぶ者が皆天国に行くわけではない」というイエスの言葉は、当時の世界でも画期的なメッセージであつたに違いない。ただ注意しなければならないのは、このような教説が決して平板な人間の同一性や受容を説くのではなく、厳しい掟の中で自然な人間の感性和制約があるがままに受け入れ、その上で偽善的な戒律を突き破る「言外の言」を積極的に示すことである。従つてその背景には、人間のおかれた現実の、苛酷なまでの厳しさがある。恰も、地上から見ればいばらに満ちた暗い藪の上で、陽の当たる花から花へ蝶が軽やかに舞うように、すがすがしい眞実と安堵を届けてくれるのである。

それは、共同体から離れた自閉的な「個人」の世界で限りなく純粹性を求める西欧の暗い知性とは、対照的である。西欧の知性が自らを危うくする機械的な実用主義と対決しようとすればするほど、しばしば受け入れ難い奇奇怪怪の世界での没我に陥るように思える。それは都市の下水に湧くふんぷんたるメタンガスの悪臭にも似ている。私には日本人がこの臭気をもてはやすのが理解できない。

今日、それなりに西欧化してスマートになった日本で何が足りないかと言えは、決して各分野

における名論卓説ではない。まして技術的教育水準は既に欧米を圧している。だが、巷には怪しげな新興宗教が依然として若者の心をとらえ、政治家は金で腐敗し、国際化の掛け声の舞う国内では老人が過疎地に捨てられ、塵ひとつない街路では浮浪者が暴行を受ける。そして、ヌエのように掴みどころのない慌ただしいだけの精神生活に、誰もがやる瀬なさをかこっているではないか。我々に足りないのは科学技術でも、気の利いた幸福論や海外協力論、ひねた個性の追及でもない。足りないのは、自然と人間についての地についた洞察であるような気がしてならない。

宗教裁判

ベシャワールの或るキリスト教団体で長年働く私の知人はいつもの口調で述べた。

「この時代にヘリコプターを見たことがなく、大きな鳥だと思つてロープを投げて捕まえようとしたそうですよ。こんな所に『宣教』など無理ですよ。福音が入るところは、やはりある程度の政治宗教の分離が進んだ近代化された土壌が無くてはなりませんから。」

「カール・バルトですか？　うちのグループでは、あれは非キリスト教的だと言っていますよ。もっとも異教社会のクリスチャンの間で流行るのは当然かも知れませんが。何せ、パキスタンも名目上だけのクリスチャンが多いところですから。」

彼に悪意があつた訳ではないが、私は心よからぬものを感じたので黙っていた。丁度派遣団体の起こした問題で怒りを感じていたところであつたから、答えれば罵声が飛び出したに違いない。

どうして他人の信心をとにかく言うのだ、要らぬおせっかいと云うものではないか——と思われる。しかし、ここに私の長く抱き続けてきた疑問——おおげさに言えば、西欧文明と本来のキリスト教との基本的な相克があるような気がした。

悪いことに、このての問題が続いていた。一九八九年九月、ペシャワール・ミッシェン病院を訪れた或るキリスト教団体の医師から、らいの手術研修を兼ねて翌年一月から一カ月ほど助っ人に来たいという申し込みがあった。このため、我々も奔走して手術適応の患者を同時期に來させるよう手配すると共に、この分野では国際的に有名ならいの外科医ワレン医師を招いていた。それに合わせてペシャワール会からも看護婦が一名、半年の予定で十月から来ていたのである。ところが十月も下旬になって、突然「研修には適当な所ではないと思います」と断ってきた。おりも折、JAMSの再編で殺人的な忙しさだった。代役で今更ワレン医師の付き合をする暇がなかった。

私が当然強い口調で理由を糺せば、「分かりました。すみません。何としても来ます」との返事がきたのでホッとしていると、数日後には「病院の休みが取れない」という。普通は十月から十二月にかけて集中的に行う予定の手術を都合に合わせて延期したのであったから、スタッフも患者も大迷惑だった。予定時期を早めたり延ばしたりを繰り返しているうちに、信用をなくすのである。それもその筈、殆どの患者はペシャワールから極めて遠隔地に住んでいる。結局ワレン

医師の顔をつぶさぬために、直前にスタッフがジープで村々を回って手術例を集め、私が「生徒」役で付き合わねばならなくなった。さらに一月にペシャワール会からもう一人医師が来る予定で、これは両方の医師にいい研修の機会になると思っていたのに、これも誤あつて四月に到着が延びた。このためワレン医師も気を悪くすると共に、私も貴重な時期を潰してJAMSの態勢作りが大幅に遅れたのである。

その後同医師の問題をめぐって、彼らの組織の中で何事か論議があつたらしい。彼の所属する療養所の所長に同団体の理事が謝りにいつて解決した、と連絡があつたのは十二月も過ぎてからであつた。これでは、自分たちが重々しく合意・納得したというだけで、何も解決していない。それどころか、私の語調が強いとか、報告で危険地帯であるイメージを与えたとか、果ては、「中村医師はこれまでのワーカーの信仰と違つたところがあり、彼の妻はクリスチャンではないと聞いております」という意見も飛び出した。

この多忙な時期に、それを知つて憤る家内をなだめながら、黙つて後始末をせねばならなかつた（ロンドンに留学中、あるキリスト教会の日本人集会で、「え？ 奥さんはクリスチャンではないの。まあ可哀想に」と或る信徒から無神経に述べられて、傷ついたこともあつた）。議論どころではない。目の前に生身の患者がいたからだ。その後日本からは謝罪どころか、同医師から「自分の後始末は自分ですべきです」と指図がましい便りが届いただけだつた。私にとっては二度目の宗教裁判であつた。憤りは既に軽蔑に変わつていた。羊頭狗肉である。「異文化と共に」、

「みんなで生きる」という標語は、所詮国内向けの美しい宣伝文句であつたに過ぎない。だが、何よりも私を悲しくさせたのは、現地を忘れて国内の都合が優先し、さらに「クリスチャンでない者は人に非ず」という傲然たるものを示されたからである。愚かな話である。「奉仕」の名の下に、人様の信心をとやかく述べ、ひそかに改宗への意図が隠されているとすれば、「為にする親切」と言わねばなるまい。

「神」を語らず

まさにそのような、自分の思想宗教・文明の狂信的過信こそが、あのアフガニスタンの悲劇を生んだのではないか。解放や啓蒙の名において行われた干渉や残虐と、どれ程の隔たりがあろう。「審きの座」に立つことこそ、我々は戒められているのではないか。それこそ神と人間の冒瀆ではないか。私がベシヤワールで、狂信的なキリスト教宣教団体に何か気味悪さと嫌悪を感じたものと同じであつた。

私が日本や欧米のキリスト教徒に言いたい事は簡単である。我々が神を守るのではなく、神が我々を守るのである。金や地位に執着しないのはそう難しいことではない。難しいのは、自分たちが設けた心の垣根——人生観、思想、生きる論理、哲学……何と呼ぶにしろ——さえからも人は実は自由に生かされている事実を知ることである。人の定義したり発明する神なぞ要らない。守らなければならぬ神なぞありえない。それは独善・狂信・偏狭・妄執とは無縁のものであり、

全ての思想や生き方を突き破って輝く圧倒的な光なのだ。躓きは下手な人間の言葉にある。

思い出されるのは、インドのマハトマ・ガンジーのことばである。——狂信的なヒンズー教徒が彼にイスラム教徒との決別を迫って言った。

「彼らは会場で『アッラー・アクバル』と叫んでいます。」

ガンジーは答えて言う。

「アッラー・アクバル」とはどういう意味か。」

「アラビア語で、神は偉大なりと云うイスラム教のことばです。」

「その通り、神は偉大ではないか。それはアラビア語で述べられているが、アラビア語は我々の敵ではない。」

この挿話は有名だが、大方の社会学者は次のように説明する——ガンジーは、こうしてヒンズーとムスリムとの対立を、インド・ナショナリズムと英帝国主義という、より大きな矛盾に解消しようとしたのである——と。これは違う。私はガンジーの崇拜者ではないが、凄まじい宗教対立の間で苦しんだ彼は、もっと事の本質を深く捉えていたと思う。人間の下手なことばから、ヒョウタンからコマのように観念上の虚構が力を持ち、無用な人間同士の対立が生ずることを、恐らく熟知していたのである。

ともあれ、「名目上の現地クリスチャン」や「市井のイスラム教徒」の方にこの時ほど親しみ

を覚えたことはなかった。これ以後私は、一切「神」を語らない。それは共有すべき神聖な普遍性であつて、他を排除する思弁ではあり得ないからだ。

「アッラー、アクバル（神は偉大なり）」と叫ぶ朗々たるアザーン（祈りのための読誦）の声、祈るイスラム教徒の敬虔な姿、「我々みたいに悪い奴らはない」と言う飾り気のない人々の純朴さが、はるかに身近に感ぜられた。異端でも良いではないか。それは天が決めることである。お陰で私はもっと樂天的な人間になった。

世俗社会

これらの出来事を通して気づいた興味ある事が、もう一つある。外国人宣教団体が、一方で「神に従順な、清らかな生活」を説きながら、他方では祭政分離の世俗社会を現地で積極的に肯定する事であつた。現地社会の特殊性とでも言えるものは、人間生活の隅々にまで伝統と結びつくイスラムの色彩が入り込むことである。それは挨拶から始まって、冠婚葬祭や断食などの行事はもちろん、羊の屠殺に至るまで人々の生活を律する共同体の基本的色調をなしている。伝統的なイスラム社会が崩れてくる都市部では、必ず現金を要する消費生活が浸透し、彼岸の救済という抽象的なテーマよりも、現世の享樂が優位に立つ。近代的な消費生活は、まさに伝統社会に破壊的に作用する。キリスト教宣教においては、厚い伝統社会の壁の崩壊こそ期待される所であり、言い換えれば「世俗化」を通してキリスト教宣教の「権利」の可能性が生まれるという訳である。

このような論理は、強く意識されている訳ではないが、それ自身が「キリスト教社会」の正当性を疑わせるという矛盾を示している。

キリスト教は近世以後、常に技術文明を伴って流入してきた。決して総てではないが、伝統社会の変質＝西欧的近代化なしに教化・伝道は困難だという、西欧キリスト教側の一貫性に思い当たる。かつて、リビングストンは、「探検を通して西欧の文物がアフリカ大陸にもたらされ、やがてキリスト教宣教が可能になる」という信念を以て生涯を「暗黒大陸探検」に捧げた。西欧の良心として称賛され、異教の中に積極的な価値を見いだそうとしたシュヴァイツァーさえ、「イスラム教に見るべきものはない」と断定し、「医療伝道でアフリカを救う」事業に賭けたことはよく知られている。その当時としては、おそらく勇氣に満ちた使命感であり、奴隸的存在であった黒人を同じ目の高さにおいたという点で、私は称賛を惜しむものではない。また「生命の畏敬」というシュヴァイツァーの感傷を我々が嘲う資格はない。しかし、文明と宗教そのものとの関係が問われる現在、リビングストン、シュヴァイツァー、小さくはベシャワールの宣教団体に至るまで、私は何か割り切れないものを持つのである。

論理は拙くとも、「人間性」に一致点を掲げて異教社会との融和を目指す現地キリスト教徒の方がはるかに見るべきものがあつた。それは日本人が連想する「人間皆兄弟」という甘いものではない。過激なイスラム原理主義の横行の中で、まさに命綱とも言える真剣さを帯びていた。しかし、それもまた、近代的人間観と合理的な「世俗性」を基盤とするという意味では、欧米宣教

団体と大差はなかったといえる。

価値観の相剋

尤も、都会的な消費生活や享樂は昔からイスラム世界の中にもある。また、現地の伝統社会が人間の享樂を一切否定するピューリタンのものでもない。イスラム以前の神々はまだ人々の中に生きているし、社会はそれらとイスラム的な律法との融和を肯定していた。「異教」に対して



ペシャワール市内の映画館

も、それが敵対せぬ限りは共存させた。イスラム聖者崇拜と日本の地藏様の信仰との間に大きな隔たりがないことは、少し庶民の生活を知るものは容易に察することができよう。「ジン」という小悪魔が石を降らせ、てんかん発作を起こさせて人をからかい、皆はいたずらで迷惑するが、日本ではさしずめ人を化かすキツ

ネ・タヌキに比較できよう。決定的な力はないから相手を抹殺せずとも同居できる。楽士や旅芸人たちは表向き蔑まれながらも、人々に欠かせぬ娯楽を提供する。地震・水害などの自然災害は神の怒りであるが、祈りと善行をもつて償い、満足を得ようとする。そこには、原生林の森のように、自然なバランスを持つ世界が息づいているのである。

人間は常に、新たに流入してくる価値観と、過去の生活様式とを矛盾なく同居させようと努力する。それが一般化せぬ間は、形而上的な観念操作で納得のゆかぬものの説明を試みるらしい。ここに哲学や神学が発生する基盤のあることは、現地社会を見ているとよく理解できるのである。それもまた、発達した大脳皮質を与えられた人類の宿命的な営みであるが、気の利いた理屈を捻り出すのではなく、存在の意味をかけるだけに真剣なものである。概念操作の不得手な日本人には分かりにくいものかもしれない。

混乱の元は、近代型の消費生活が、常に「科学的な合理主義」を背景にしている事である。例えば、断食の習慣は、アフガニスタンやペシャワールではかなり厳格に順守されているのに、西欧的な文物の浸透するラホールやカラチなどの大都会では崩れかけてきている。冷徹な資本の論理が都市の現金生活を貫き、精神生活を支配する。伝統的な神聖な空間は人間の意識の中から消えうせ、歯止めを失った消費欲が無制限に自己増殖する。かくして、「中立的な科学」に裏打ちされた拝金主義が、神の座に取って代わる。これが「近代生活」の新しい局面である。

西欧の文物すべてが決して否定的なものではないが、脅かされた伝統社会の危機感が時に極端

な反応を生む。そしてこれが、現地におけるイスラム原理主義の温床を提供すると云える。それが伝統社会の健在な農村ではなく、都市中産階級に多いことは知られてよい。今や全世界を席卷するイスラム原理主義の高まりは、徒にイスラム社会の「後進性」を批判したり、強権的に先進国側の論理を押しつけることでは解決しないだろう。双方が共に理解を尽くし、忍耐強く共通の問題の根を探り、生活意識や理念を超えた共通のことはを見いだすことから始めねば、本当の「国際的理解」も永久に生まれて来ないだろうと、最近つくづく思うのである。